

校長先生を成長させてくれた「ある挑戦の夏」のお話

和田岡小の皆さん、お久しぶりです。元気にがんばっているかな？もうすぐ夏休みだね。和田岡小の皆さんにはこの夏を、ぜひ、今まで体験しなかった新しいことに挑戦する夏にしてほしいと思います。そこで今回は校長先生にとっての「特別な夏の思い出」を紹介します。

それは大学1年生、19歳の夏。山岳部に所属した僕にとって、初めての北アルプス夏合宿。剣立山連峰を一週間かけて縦走(尾根伝いにいくつかの山頂をきわめ歩く登山方法)する大冒険だ。中でもメインの剣岳は初心者にとっては難所中の難所。日本百名山の一つに数えられる標高2999mの名峰。その頂上の切り立った岩峰は、その名の通りまさに剣先を連想させる。山頂付近には鎖やはしごを頼りにはうように岩場を伝っていく恐ろしい場所もあり、「カニのタテバイ、ヨコバイ」と名付けられていた。そんな場所を50キロの荷物を背負って進み切る自信はなかった。高校3年間を帰宅部で脱力して過ごしてきた私には、なにせ体力もなければ、根性もない。鎖場では、疲労と恐怖ですっかり足がすくんでしまった。すると一歩を踏み出せないでいる私に前を歩く主将のY先輩が声をかけてくれた。「梅葉、がんばれ。ここを渡り切ればもう頂上だ。」後ろを歩く仲間の声も響く。「大丈夫。ゆっくりでいいから。」「いっしょに山頂に立とう。」不思議なもので、みんなに応援されると、自分の尺度で決めた限界の、もう少し先まではいけるものだ。私は岩肌に通された鎖を強く握り、ほんのわずかな足場を登山靴でぎゅっと踏みしめ、山頂への一歩を踏み出した。

朝の剣岳山頂は晴れ渡っていて、眼下に雲海が広がっていた。これまでの人生でこれほど美しい景色を見たことも、これほどの達成感を味わったこともなかった。

下山後の反省会。この登山を最後に引退、学業に専念するY先輩が私たち下級生に「餞別だ」といって小さな箱をくれた。開けると「錫杖頭」(昔のお坊さんの持った杖の先端部)のレプリカが入っていた。Y先輩はこう言った。「剣岳はあまりの陰しさから、明治40年に日本陸軍の測量隊が登頂を果たすまでは前人未踏の山と言われていた。しかし、初登頂を果たし歓喜に浸る測量隊が見つけたのが、そのさびた錫杖頭だったんだ。これがどういうことかわかるかい？」「・・・。」「その錫杖頭は、鑑定の結果、奈良時代後半から平安時代初期の修行僧の持ち物だとわかった。登山ルートもなく、道具すらなかった1000年の昔に、どうやって登り切ったのか知らんが、すでに登頂を果たした人物がいたということだ。人間の可能性は無限なんだ。あきらめずに挑戦すれば、できないことはないんだって、俺は教わったような気がする。」

「山を思えば人恋し、人を思えば山恋し」とは、昔の人はよく言ったものだ。はじめて剣岳山頂に立ったあの遠い「挑戦の夏」を思うとき、挑戦することの素晴らしさを教えてくれたY先輩の姿が昨日のこのように目に浮かぶ。そして、山岳部の懐かしい仲間を思うとき、共に踏みしめた山々の頂が鮮やかによみがえってくる。

今年の夏が、和田岡小の子ども達にとって素晴らしい挑戦の夏となることを祈っています。

校長 梅葉 紳介